

および事業の経験をふまえて、極運動は結局は全地球的活動を反映する現象であることを看破され、地球潮汐、重力などに研究分野を拡げられ、研究部の増設につとめられた。緯度観測所の庁舎、施設も面目を一新した。

VLBI, SLR および重力絶対測定技術などの超高精度の計測技術を背景として、測地科学は変革的な進展を迎

えようとしているこの時期に博士を失わねばならないことは誠に痛恨の極みである。引退されたとはいえ博士の陰に陽にの助言は我々をどれほど力付けるかと期待されるからである。

博士と幽明境を異にした今は、生前の御業績に敬意と感謝を捧げると共に、安らかな御冥福を祈りたい。

若き日の奥田さんを追想して

清 水 彊*

奥田さんは日頃スポーツで鍛えられていただけに、いつも御元気そのもので、私の知る限りこれまで病気されたことはなかった。従って、先日偶々新聞紙上に奥田さんの御訃報を発見した時は、正にびっくり仰天であった。後に奥田夫人から伺ったところでは、御当人は肺炎と信じられていて肺癌であることは御存知ないまま、約半年の闘病生活を続けられた後、胃の潰瘍による吐血多量で御他界とのことであった。奥田さんの御逝去は、測量界にとってはなお永い将来の御活躍を期待していただけに、大きな損失であることは何人も認めるところで誠に残念である。私個人としても、ほぼ半世紀に亘って親しく御付き合い戴いた畏友と、幽明を異にする悲しみと淋しさは拭いえない。茲に、奥田さんの思い出の一端、特に測地関係に携われる以前の若き天文学徒であられた頃の事柄を記して、追想させて戴くことにする。

奥田さんが虎尾・長沢さん達とともに大学を卒業されたのは、私より1年前の昭和8年であるから、奥田さんとの出会いも私の大学入学に始まる。当時、学部学生達が皆で三鷹の東京天文台まで出掛けて、天文台職員の方々との交歓を兼ねての野球試合を行ったことが幾度かあったが、殆んどの場合捕手を引受けておられた。この役割りは奥田さんが後に東京天文台にはいられてからの天文台内東西野球試合でも同じであった。

奥田さんは大学卒業後、東京天文台の橋元昌矣先生の私的助手となられ、同年9月から始まる長春における天文経緯度観測のための恒星選びを先ず課せられた由である。そして、橋元先生が昭和5・6年にかけての小惑星エロスの接近時に26吋屈折望遠鏡で撮影されていた星野写真乾板の測定や整約計算を、やはり橋元先生の私的助手となられた虎尾さんと共に、取組まれたらしい。

昭和10年1月から3月末に至る期間には、奥田さんは26吋屈折望遠鏡に付属の分光写真儀を取りつけ、前

年12月に発見されたヘルクス座新星を観測された。そしてそのスペクトル線の同定、その分光型や視線速度の変化、さらにスペクトル線の強度や巾、などにつき詳細に検討された。また、昭和11年6月に北海道で見られた皆既日食には、奥田さんは橋元先生に従って中頓別で太陽コロナの分光観測を実施されている。その観測装置は当時東京天文台内に放置されていた Troughton & Simms 製屈折8吋の赤道儀に、26吋屈折望遠鏡付属の分光写真儀を組合わせたものであった。この観測の整約には奥田さんが分光測光を分担され、コロナ連続光の強度分布を同じ高度で観測した駁者座の星のそれと比較して導き、コロナの各輝線の強度から得られた知見を報告されている。

この北海道皆既日食後、東京天文台では関口鯉吉台長の下に26吋屈折望遠鏡掛りが編成され、服部・奥田さん達のほかに、その時入台した私も加えられた。服部さんはZeiss製8吋望遠鏡による太陽面観測をも兼務されたが、後間もなくその方の専任となられた。従って、奥田さんと私は昭和16年までの約5年間を、関口台長の下で同じ研究業務に日夜協力して当ることになったのだった。まず、私達は竹田さんその他工場の人達の助力も得て、それまで円滑な作動が困難であった26吋望遠鏡赤道儀の解体修理に取り掛ったのであった。しかし、その極軸など不完全部分の改造や修理を経て、再組立と調整を行なった後、対物レンズの検査終了をもって、この作業を打切ったのは昭和14年であった。

それより先、昭和12年末から約1年間に恒り、私達は26吋望遠鏡に付属の分光写真儀を Troughton & Simms 製8吋赤道儀に取付け、B型からK型に至る26個の輝線の分光写真観測を行った。そして、B-A型の16星につき水素の $H\beta$ と $H\alpha$ 吸収線の強度比を調べると、B型からA型に移る段階で特殊な変化が認められるのに気付いたのであった。なお、昭和13年には晴天の日没後約1時間における薄明の明るさを測定することも試みて

* 仏教大

いる。再組立後の26吋屈折望遠鏡による観測は、昭和14年末に起った駈者座と星の食現象に際し、その分光測光的観測を行ったのが始まりである。この観測により、主星の大気中における種々の原子の含有量に関する情報が得られた。

話は変わるが、関口台長の御発案で東京天文台から天文学文献抄が出版されることになり、その第1冊は「新星のスペクトルに関する最近の研究」と題して奥田さんが執筆され、昭和12年末に発行された。(ただし、この文献シリーズは昭和16年発行の第9冊が最後となった)

東京天文台における奥田さんとの関わりは、私の同台からの転出で昭和16年3月を以て終り、翌年10月には奥田さんも陸地測量部に転任されることになる。この間奥田さんは昭和16年9月の石垣島の皆既日食において、関口台長を補佐して太陽コロナの分光写真観測を、

また下保さんとの協力でコロナの直接写真観測をされている。

若き日の奥田さんは以上のように、恒星大気や太陽コロナの物理的状态に対する観測的興味から、分光測光に取組まれた。種々のスポーツを巧みにこなされたことから推察される奥田さんの器用さは、観測や測定の際にも窺われ、手早く軽妙な調整や的確な測定操作にはいつも敬服させられた。その頃奥田さんとは業務や研究の面で、お互いが納得するまで随分よく議論しあったものなどの印象が深い。

その後、奥田さんの陸地測量部・地理調査所の時代を通じて、私は測地業務の面である時期は間接的に、また他の時期には部下として直接的に御世話になったのであった。従って、奥田さんの思い出は尽きないが、以上に止めさせて戴き、遙かに御冥福をお祈りする次第である。

奥田豊三氏 (1908—1983) 略歴

明治 41. 1.20 富山県富山市に生れる。

昭和 8 東京帝国大学理学部天文学科卒業、大学院に進む。

10 東京帝国大学助手兼東京天文台技手

17 陸地測量部勤務

27 理学博士

36 建設省国土地理院長

38 文部省緯度観測所長

46~47 日本天文学会理事長

51 緯度観測所退職、緯度観測所名誉所員

53 日本地図調整業協会会長、勲二等瑞宝章受章

54 学校法人日本建設学園東北測量専門学校長

58.10.7 死去

奥田豊三博士主要論文目録

東京天文台報: 駈者座と星の大気に関する分光測光的研究 (I), 8, 29, 1940

Bulletin of the Geographical Survey Institute: The Land Deformation Accompanying the Fukui Earthquake of June 28, 1948 (Muto and Harada), 2, 27, 1950/ On the Mode of the Vertical Land Deformation Accompanying the Great Nankaido Earthquake 1946, 2, 37, 1950/ On the Change of Local Geoid in the South Western Part of Japan, 2, 239, 1951/ Determination of the Differences in Gravity Values at the Coast and Geodetic Survey (C&GS), the National Bureau of Standards (NBS), Washington, D.C., and the Geographical Survey Institute (GSI), Chiba, Japan (Inoue and Suzuki), 5, 1, 1957

測地学会誌: 日本の一等三角網の振れ (北野, 檀原), 2, 8, 1955/ 千葉-ワシントン DC 間の国際重力比較測定について (井上, 鈴木), 3, 27, 1956/ On the Secular Variation of Latitude (Sugawa), 10, 207, 1964

Publications of the International Latitude Observatory of Mizusawa: Local Non-polar Variation of Latitude Deduced from the ILS Data for the Period 1933-1965, 6, 231, 1968

IAU Symposium: An Interpretation of the Ambiguity between Annual Terms Obtained by Time and Latitude Observations, eds. Melchior and Yumi, Rotation of the Earth, 49, 1972

() は共著者名を示す。